雨夜乃記

伊地知文庫
文庫20
190

伊地知氏書册

宗祇老人ハ年比尋ね来る
世中のいとはなく人の更ニ
なれハ雨夜ハ常ニ燈乃もとに
て書ハ書ハ祇ニ伝ハ稽古ハ祇ニ
ハ書ハ正伝ハ[illegible]ハ三事
ハ代書加へ[illegible]道の新古老人の

文庫20
190

ものなれば世外のものとて世ちえ
云あり連歌乃興義是一門一ゐ
曲〻次第に永正十六年のの
卯さ月のみの十日ゐ長すーをうかね

宗長判

連歌雨夜記

一前句付句引合すれいんひいのすて付句計
引放せはへ別よなるもあり
よれ〻ねくやなれさく法
梅の香の雲かるる月は袖よりて
右前句より引合いれ也一句ハ梅は月ひ雲
よる月を袖よやさしてうくるんあり
月ちのけ〻をおらぬかしさ

五條ゝ秋乃ゝ夜乃月ゝ袖ゝ
引合て月ゝ
夜乃ゝ
袖とゝ

行へゝ
雲ゝ尾上ゝ
引合ている山の雲を踏分て入そゆんいさや
ゝゝ乃ゝ

お宮ゝ
沖ゝ
引合い沖の小嶋にあまゝ
より出る舟ゝ
ゝゝ舟ゝ
ゝゝ

吹風ゝ
あゝゝ

引合ていの神前れる葉蔭て神のちるれ
ものうしと紅いりるちらちらねんあり
一百い神の歌をあつりてはかまれはと
ここちりい戸帳あり
一前百い人れるなると禽獣草木れら合
ちれるせるあり
ちるれかしや古れ状
歌よ凡い河はるり歌わ物てん

ちるれりまいはいりれ中
お俺ぬちまるあまるの変ちら
りゆきのかるふに帰るお 函
庵てなく素とふ舞色や明ねん
さきれ舞や人なりひを伏まてん
もりてやとの流れ松り後
きりほるわいくるる葉
富のなくるもものとはして

一貪欲を人ものうらやみ
ちらぬ者なく雪の夕れ
ゝこちらをあしたまもるに
男鹿ゝ山人ゝ
あつ葉をたきあつ
雲いかりいへるもの
ちるゝ
一夜小弦葉ゝ文字すてゝ

人のむすこ清元の稽古もし
ちかくて色いかるくすかの格好
雲いかりしいこなねともとる
ちかまつかつ色種い格好
あらいれぬれいかり手拍子なわ
明はま清雲九を山眉ゑ仕て
雲ゆく月より月い出久
秋文松川まそ人のまくらん

一前白九やのかよ付やうあり
行ゆや一清遠方九あ
海士小船いくわうらうして歩沼
一九おかるやさうかるうん
色うろ秋九をみ山乃夕日新
一付白の文字お白九やうり立戸れ
一白乃かさわよ垂ゆあわ
とけうおれ九てこそのき

ちまちすでに去れば何ぞ捨小舟
木の葉かくれぬ山何の末
男鹿なく家の面影秋更て
雲居霞はさらぬ色の色
雉子鳴く荻原焼ぬ野辺ちそへ
一景白沙さわる合て分くるる
かをぬ杉のもる梢末の紅
太山路い去ぬ雲葉を花ぬ
なれ海漁ものこゑさ紀伊て
梅の香をきくり火ぬて
のこりてを表ぬ鳴る去の花
梅の月の秋原有ぬ月
植てを竹ぬ後よ任ぬる
ちまちすぬ小田のよ面のみ山
暁まくし入あぬ滝
郭公行ぬ和つすれば日ぬ入く

一前方ハ他人ハ[illegible]ものを我身ハ[illegible]人[illegible]
[illegible]りふせるあり
打口すゝ人を引まさひしき
[illegible]川を隔月に詠[illegible]て
いはくれ人をんなびし
山里のもよたすむ夕まれ
一[illegible]と云分かる吉夏を分[illegible]る
藤はいい[illegible]く入あしの葉

[illegible]山里にむさく陰[illegible]て
いつち行てか松さるかし
二たよ却りひられて荒[illegible]
[illegible]川の夏と[illegible]
霧の秋霧[illegible]
一山[illegible]
[illegible]

柳 [illegible]九 [illegible]川遠[illegible]

山里よさし入侍きこゝにおりて

ゆくゝ樵夫の歌聲い耳のゝれて

小舟すて遠江こゝて富士れ

一前句れ末の文字を付句発句

てゝゝゝ

程なきに波代さゝ波士小舟

袖敷の川を岩はしれく

人よさて句ようゝ心津浪

立石寺山れ　秋のいろゝ

一付句の中の七文字を臂（ヒヂ）とゝいふ句

うこと羅紗の夕ゝれの色

郭公芦れ思ひよ明捨て

うゝゝ野ゝ庭て城跡

あれゆきい尾花ゝれ里ゝて

一詩れ對句れゝくゝよ付句

越前ゝ家い八景のきゝ雲

沖津浪月は重なりて
さよのねざめの
白妙の雲の招山よ蟬鳴て
山陰の月や色の部所
秋は入日よりはやくなく
前白よい俗さよの端的の変を対る
さびしつつ誰にかつ
たぶらかしもあをを欲ぬ

我ん誰よりつゝ華秋の空
萩よりタ凡　雲うゝ孫
志のいんとてやしけの空
小萩哉萩より凡妙く咲れ
一くるきとゝ白にくるきを対る
くるれきるゆを思ふもてる
為よさはちとむこあかれて
くるきを対文れ

雲凡よいしやはんとり待後て

一前句よいへる所のさまをきてとる句

田舎をとこの物そり形き

家もしなれの行一ぢくよもぬて

誰かハせをいんとり受山法

花の乃柳本ゝ梅咲て

一前句よあらまふさまをいるを引合て

ゝくふまるを生とる

きのふともやいうつる人へ

化人と来てもとゝせを咲

ニテしいく人と乃しを思ふ身よ

毎月よりてたゝたゝき最

一おもよこゝろ

世ゝ

あまりうゝ世を人よこゝや

別てふを誰為よりたゝん

世乃ゆめを松よりてや
なを凡りのうちし紅つゝ
こゝろや神ぬしのくゝの
きをふと志ゑの月よハへらん
一おゐれ誰よりとんと云ふ
かいなし此仕ゝ
誰より春れ好ゑいまし
つれしい震じとゝ乃紅ゆき

秋よりゝとゝあれなこハほし
月とくゝ住人ゑれや苔の庵
一対白の赤ようふをそへくゝゝる
んれすへよしのをゝれ
待もやし恨もせしと云捨て
のこるやまの葉山風の声
おゝふへきあれいもよとつきて
一ん傳きゝゝ乃よ氣乳を付ゝる

雨のむしろにいさもあらいあし
月のころ特場れるの船ばけ
うきみ思へあちきかの世や
遠山れるのゆへうれて
一前白よ糸氣二白続きるかん　斜へさと
落葉よう人倍紅の朝染
秋のあれを行よ人
俳諧れ　八幡汐

あまもかとうへんふうう華
糸氣よ糸氣を生るる白あり
春山の春よ長川　春
枯れ葉よかれる月八遊ぶて
雑り柿棒の里八まうれて
小紅すて亜江こそれれ
春しろき野れ春の花
指うすむ山な遠く春ゆて

引つれもなく横雲たなびき
まれに夜の月よ一筋二筋まで
旁に山もなし　志賀の辛崎
秋の夜のかすみたる山の端のみて
月もしられかしの（海旁の名　雲の名）
林ずゑ廣野の末は富士の花
遠山の端乃秋のさびしさ
天津厂沖まく永の法をひて

きしの波　霧を分て出
虫の音　船の色の遠山ゑ分こ
一ん流　霧の乳のうるる
山や海　ゑんとゆきわるるふむ
鄰公　雲ゑ月よ待ゑて
雲ゑ雲のまれ　遠山
きしの波のむものゑ海あるる歩
公屋かたちの衣の音あい

虫をきゝもの見ハよ月更ル

一句の余氣

すゝ吹ハ　さきいりまて

よし野山　ものゝ古々春急て

一前白何を対ても対へし又させるゆ

あるまゝき白に毎ゆるゆを対出しる

ゝ　れ　ゝ　き　去ハ　来よ　ゝ

あ　ゝ　ゝ　ゝ　彩　梅　香　よ　梅　さ　て

ほ　ほ　ろ　つ　よ　殘　る　き　ぬ　の　月

春の夜の梅ふゝ小舟哉更て

老て又ふ月ゝ　む　す　あ　ゝ　き

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

一ゝ白秀白ゝて空ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　て　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

我袖のほ月ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

一逢とゝの羽よ変てうわを分へうこと
あへハ中くゝの無きも色
よゝあれとちりつくねまの無ま
あらん限をそなこそまて
新うすき行くれ月の神秋ふ
あへはまるゝ人の拾葉て
山路やすゝふゆゝちの雲
一ふ白よ行る羽の角をすて分秋あわ

梢ちり石染ハ行る山里ふ
独くれ切り未うゝ北風
梢ふも石葉ふも不分但未うしまて皆ゝ色
庭よ入ゝ川未拾の風
ゝきゝ日ハ聖ゝ色のふ色も人命れて
聖ゝ色のふ色庭よ入ゝ川と分ふり未拾ハ
分ゝきゝ日ふて分てゝ
仏水のまハ去よ埋れて

原田を植る 殘り有れば

田をうゑる殘り出よう つりそこ付こわ浜ち

をはすてゝ殘る〳〵但田の辺よりあらはるゝ〳〵きりハ

霧分佐〳〵の殘る日の霧

山ゐるこもの本来あらはれて

こゐる山のむよ分の殘るゆゑ日影暮者

但むさゝ〳〵山の霧あるよ日影あらはるゝ〳〵きりハ

あとよりきりゐる山の薄雲

初人の袖匂ひうゑ雪ありて

初人のあしの跡うわ雪殘るゝと付こ雪云

不分但雪の山よ雲なゝ〳〵色ゝ

雪ゝの霧をとゝ〳〵ゝ秋月

月をゝ夜半の嶺ゝ雲ゝ

月よ霧をとゝ〳〵ゝ但て秋月をすてゝ殘る

但秋月の杉高ゝ

かゝれ住ゐる山ゐ月ゝ〳〵

ちりも雲を結ぶと氷石日ま
氷のきるまよりあつめ　れて位置に結ぶ
雪の山不分但雪乃山ふる
一切りくゝのたゝ文字に結ぶ
切りくゝはとゝぬるもうゝ発し
だかそねし一夜を今ハ命まで
四くゝい今より仏ふるいあくゝ
結ぶてゝ見ふすまゝ月中花

切りくゝハ雪ハとゝく消ゆ
きの雪て富士のねいつゝ結ぶ
切りくゝハとゝ云ゝの字せいゝい切りくゝて見ひ
くゝきとゝてゝくゝ
一おゝ白のくゝとあゝゝ紙よゝ乳ふしゝゝ白
をよあゝゝまゝそゝ月をゝくゝ
老のちゝはゝくゝ八ゝ安ゝゝ
前白ハ高山ハ四時ゝゝ付ハ八範嵐

ゆきちりかしらくるゝ也

いしの時かハまこよ　ゆれる

老いぬとく也やうるゝん

おなじハまこのいみしきらく身ハいつよわ

まこのこゝろ　こゝろ

梅うゑ者のいたくよわゝハ白あん

梅本よさくゝ　むのあれさ

前白ハそこゝろとくゝ白ひまゝ梅あり

梅の枝よ也ひとりあゝ

ゝて白ハあゝまこきんゝ

おくゝゝんたるゝゝし松梅

老ぬれを哭ひしるれひ也

おなじハ白ハ白て云ゝるゝあわ身んゝ

ゝんゝゝゝ哭ゝちよ老ゝる也

いたくゝハ松よまさる者の也

遠山梅あをゝつよゝゝんゝ

おなじ都よすがらむかしあしとあり
けんかいなくゆうあうんさつ〇くさ
いうれの宮年うたよりはる
たつ秋しよりさをのかへるあきはを
前白ゆたつ〇くさるんくけんかいたつ〇しくさ
今一しるをあきをはるきた
ゆうさくさ未雅うの歳のあき墨云
前白一しるを帝くさるよりさるんあり

けんかいは裏のりんよりはけ樹の牧墨よりおけりうとく
なを盛秋乃ちあうれもなりあて
れのく松れ雪陰夕れ
前白は去秋のあくそひくけんかい桂雅
松の雪のタれは去秋つて安ある猪うるとく
一こそといふ白よりけ二輕ありさうあて
けくる白
人こそ人とはなるかまけ

雲井とあつかね窓を照すらん
梅しもまれをなあらせ
雪のこる深谷の棲居さて
秋しそん法起りしといふなれ
誰も見れんうるまきのみそ
佛法僧しとるもしそ不寧
人いふと詞を化よりしすらん
露しそのこれ秋れの枕

山遠く月ハ入程れなむすら哉
さ浦わよとしそ舡のよるある
松そる寺山りとのゆかれ
むしとい人のうるもろけきよ
むしそのまち梅志賀の古々
せめそ咲つりし昔かたくそ
思ひ出てさりんすしそかくう絶
一さりかね付ておわまよ志つふまそと云こと

浪こそ見てねぶたからん
ちるくとほぎ(ナギ)ほうる船のあり家
ほとれの月や西よりそ見
秋ふるまき羽の稍小倉山
こてこそいとゝ思ふられ
き人の居(モイ)にのこる山桜
一そとなるよ対松二ゆるあこそて住るる
ふとあるねみをたゝく住る

ふくの角しき代よ生れ出て
桜そひつね峯れきゝを
吉柳のうゝきちるくを吹
さまるそ却きあさ外嶮
人ゆる山さゝゝ戸の雲る家よ
あふさう陸山さゝゝ戸の実寺い
人やまるねをやろゝん
人のあきそ寺をる沢ノ

法の場人の教く立ようて
一又さとて外ふるそあわ
ふくてつ世の中とき
掘出れをいとくを面白て
もすをさのふ袖を露きき
置いあれてなものを独自ふ野ふ
法士の衣そ又見も解き
きあれる袖い涙を汗出て

とうを法しとの情ありを
人を法宿ふ出ぬ去れて
一ふ命さんのふ頼ふくあり無業ふ
ふきをもふふ又歳ふ出ぬ物をを去
去ふくせふて去ふとれ
れふさい男に限ふもの無
よりや去はい思ひふさわ
男ふ限ふふきせふわたふ出ん

はるる君ようこそのたまへれ
人よりの恵みを捨てもかなせん
人よせめて一さしよあれ
つれなくて寝る果いかなせん
為よりきんこひいかなせん
とけぬと人のうせとふよ
力不及とせんとおもふらんあり
絶てやいかりあれもかなせん

村雨の宿の秋の夕くれ

義孝

無路なるもきき害をいかなせん
ちまてもあ人をば
人事秋の秋をいそせん
いそもてらよりんと思ひ新てうち
かりまちうつ
いそなんをいそけて峯の雲

むをいそもは雪まよかりて又雪をきて人ハ
むゆよりかりいそもんと我ろ笠ふる反
ゆをとり
一物をといふ初よ三つ人ゆ曲て生ゆる白
うき世乃中よりもあらいあれ
なほ思ひ老せぬ人も分き物を
とりゆんや神よまりをせむ
云の葉を人よをすもう寺物を

おなしよあるもにし変ら
ゆんきゆりのさをぬれ新
新しのむもも志ろ人ゆ白を
陸奥い傍寺國をとやゆ白と
あとやれ松よさりり月新
見さるゆあい我さ人ねゆを
行をはしるよう寺名をゆん
人ゆうひて行ゆる

あのまへよりふるすのハるきぬを
まれぼしなすあをつき山
ひとしほいろるたかもみきぬを
老ぬとをうくるものあるかな
又て後出へき月もあるを
かねたうけの秋のあつき
きのりれあるつき鈴る月ゆれ
ゆ福て伝らん之よし秋の嶽

一前白土とりをせあるる白ま外白ま
うきうきといいをいしい
武蔵野よ秋の青ひをとる尼
かやう末葉乃ちるの七月
男春るん世よなとみるる尼
鹿のまれ秋乃夕くれ
ゆりねを思ふ我男つ秋
入山毎れ華一の去八

指すも根ふもかつてはもなて
ちりれいつくよまいはらん
吉野のうさて見ぬふる
わすれぬ寝を我いりとして
ひろもよりつくは
一あの寝ふ仰て捨てめ
一あまりよきるとい今侍く分ては
山郭公ゆくてゆくら

いのどうやもの暁少月夜
吉野の夜いつれとふねて
ふ鶏なく鳴て月海てき新
一おの白と分て別を分ふする
身をふるも神の憐
極し田の桐光して降毎
人の身を田のまよふし神を電り
分ふしくり

[illegible]とよっつろ浦凡
[illegible]白ふ椎のさと山の秋文て
うゝ凡を椎の葉のうゝよ分ふし[illegible]
秋のふう家のよもせわ
幽なる蓮を横川のさゝまて
横ゝ水さし捨ゝ[illegible]あつさ
横川の寺の蓮を東の川よりうるはし
[illegible]ハふきあのゐろくるーき

山ふきのもいくへもおてらむ
為を山吹のゝふきひとわ[illegible]てく
鳴門(ナルト)の渡凡のゝさき
志水のなも位ふきわ秋れ
名所は鳴門をアのふるとれ波く
鳴門よりさし出れ海ようも
ワれそよるへのふきん地せ
一文字を分ふ[illegible]て見ふる白

忘れ草ゆめ見るのの月の秋
ゆふ色のくさむらむらの遠山
紅葉のきやけはいと七月むしの菊
こがく迄おろし神一人の色
あさひし家の松風流の色
ちらちらうつるよ木の葉ちる
あ女の家夕くれ乃て
山里いとの白しょうるの色

一ちらさきあよ大ゆるあを分うるる
をいきゝ波をとゝ波法士のさ
大海の遠きを塩ニてよあさりて
ちやきりくゝ袖あのむ色
霧の言葉おのあゝ沢野へ拾て
霧の情そあくさちゝるる
波よわも人を恨ふき世よ
ふるさとしや一年の秋

行のこゝろ松ゝうゝ後はゝて
一大きゝゝゝ和よちいゝ紀和を行ゝゝゝ
お出てゝゝれハ四方を遥ゝ
礼拝ゝゝ拝ゝる方の地ハ廣し
雲ゝゝの月ゝゝ新てすゝゝ
奥山のゝゝのゝ絶ゝゝゝ
ゝゝてゝゝゝゝ行 ゝゝの山
笠ゝゝゝき御ハ誰ゝゝゝゝん

ゝゝゝゝゝゝゝ行ゝゝれる
筆ゝの図ゝゝゝゝ舎ゝゝゝのゝて
一大ゝゝゝ難句ゝゝ対ゝゝゝゝ
佛法僧ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人ゝゝゝゝ利を化ゝゝゝゝん
物ゝゝゝゝの声ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
初秋ゝゝゝゝゝゝの神垣

迷ひてや我世をあくいのるらん
踏よ（カキノ）　行くるる人を志ゆきゆけ
多れ想ふ（ゆけ）い波のさいきの世をて
およ出ねそ新家なるる
あわ〳〵と身をもわたらん
車のたよのよ　しゆるさ
人のるる馬場のひより時とて
一うきよつ〳〵きうるしまいはし新あれし

一白のうちよ張ひてゐんがりうく
見も秋ゐんの歳ぬれ長
まくうぬ人ゆ身を注ぎて
恨滝注く志やうつる華
うき時いつし宿とと
おれ見ひのかうるも我
言毎よきのしたうきいつて
何より秋の佛しうるし

世のうきよかへなさいかきねと
思へるくとて寄るも一ツの発
人よりこしらさるこころ何なり
実もひとりと思ふ世の中
護のよろ方のうきなれ
世を等なりとしまとしてふ　歌
一ツきうれしきハ一人ぢきんく
かりそめ言葉

今清盛のハあり仏をの家
絶れくうろ舟寄を出て見よ
日も夕ハよ宿やたのまん
為も文ハ枕いりくよかわ哀
桐をの山乃松そひさしき
秋ハよ人為ハなくも立ハれ
うらんもとうれ思ひ捨ハや
れろうあてうへきたらハ和歌の浦

はれハ雲やたちわたるらん
ゆわすし方を浦ゝ[illegible]
あくやもゝくさねの秋のタくれ
月待とゝくをあるもあやたるよ
うたくといつもたゆのうち
加出て貴ゝ夜[illegible]ねのうゝの山
一うきを水[illegible]
海雲よこゝをゆくゝ[illegible]

あらはれのゝ独ゆゝる山
たるうゝるゝ遠ヲの浦ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]我胸(心子)のうち
[illegible]ゝ[illegible]
待人ゝゆゝ月出るそゝ
[illegible]ゝ人の寝ハよもあと
あしたなもよ誰を待ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]

うゆの山へよむ人富士の根
一ぶと云幻二程をんなきる
ぶありふしの姿わくゝわ
人の世ハ読んのうちはゝちて
くゝ時のまにうる海原
塩ゆそハ汀の松を沖よみて
ぶ一筋ハ思ひあわゝわ
むよ暇ゝ本の葉よ人を待宿て

ゆゝ都ハくゝ秋九月
下葉黄ぬ梢の月よ出ぬて
一文字ハゝゝとゝんよ行ゝる白
寂(サビ)しき空(ソラ)ハくゝ壁への去
のゝ薩摩ゝ庭の芝生よ星古て
ゆの山空くゝ月ハくゝわ
人世ぬ尾上の宮の石屋根
ゝゝゝハ風稲妻の新よ似て

横雲出るを時雨とも
袖のうへにそ共秋の月
夕月夜明ぬ
くてふ秋そ共もしら菊
開の汀よ松れ葉ハ朽て
一夜といなあまるのんを月をあはれ
しらいふ共もするゆへ親を情とふ共
孝行よするゆへあをほしるんもあり

假をとうるんもあり
のこりてそ長ハ場る春のな
ぬうなる夜れ
情しいうるんを後の宿
うち分りてのあつまりの
れてそくのの名残ハよりも
村雲ニ月ハ居ぬ長のそひやせん
さしてきも共るもんよ菊の居

春ともさけあるまきのあ
ゆふへのあとあれくらわ
為ふそしむんよやとれ秋のを
いつれも時しらきんあり

一初よ付る白

住吉の岸は里れんのうて
出井の浦ようらよ月
あれもいろをそふ神垣

秋ふ付るゆふ付る声ひく
かく声の竹よ吹ふ葉
青淺き蓮山鳴れ里よ春て
神垣のわのるあれさ
里くれ鶯きて更陸る
一おるよおを要れ初地ほく出るは
付白いかのうよ共紅をあるひて
宮打てうひ高く神る

神もとあるさん
ちらちらふるもの
れ雪の降ふるれ
の紅瓜（ホウカ）よあるハ分るよ
きよゆるつうよ分るし
いとく旅やうしたるしたるし
義よやく成らしは火我義
来ぬ人をまつうの間のゆふあきよ

焼やうしはの男もこうれつて
あるぬ人と逃てゐるもの
ゐ雪を前ゐ〳〵某のゐれぬん
出形する形場の形人のゐ〳〵某れ
ゐれも清すして逃て居れる
夏の和思ひきりやハある
長き病も明ける間の降こて
我も伏ゐ〳〵和思よ伏ハぬ〳〵ね

行くのひまさへうらへ雑色うりうり
ふるうるとさそふあつまの遊
老よりや男とうきなの根をそ
俄ぬれハ男とうきなの根と絶て
さそふらあらいあんとそ思ふ
一人のあまぬく所をうる方と初とかれへ
秋ハよ海溝 出る舟うて

ほのくとあしの浦の朋者ニ
海うれゆくみとそ思ふ
あまのうらさもあきよろ
難波津の昔なゆる君ら代よ
ふるはまよりやけむ名こりう
今とそうるくとさくやこのうれ
かつるさハ時なる波うきられて
又逢ふ事も定りの世

神垂月かわく降すゝ之かき
きこれそ色のそちくしくり
きよきこゝろ秋の初風
さゝうるゝ色こそ人をねゝ貞淑
秋来ぬとやはさやそよそねとも
凡の名ゆそ地とろれねる
くゝきは法の教会くゝ
はくゝうそて色はく秋も今宮

はくゝうそて云て宮津の山と世の業宣とゝ
鶴さんとこゝとゝ守りねる声
鈴のりこしよりや遠くゝむ
きくゝうるゝりこゝまてもゝりのき
秋の初光の心なわくり
色も花も世よかれるゝ盛まり
むしかくゝまやゝ海と云ゝ葉
さゝ浪や志賀ゝ邪ハあれゝ

むしろかうの山さらうれ
地方より人きたりすと入れも忠度の宮
ちよを待ひて神楽ある宮
祭りせし数あるハさハ乗も迄
毛口多ほくまの祭らくせるもし
ひれふき人の縄の数ハ弟
はくまとせねば所よろしきそ
夏ひ虫いくもく清の声

ほとゝきすらの枕を敷(ソハヌ)く
郭公ゆくる方を泳むれも
名を明月そのれる
独我ものすむ方へ梅ひて
人のなるを宮もく
梅のもとよこそ来れ宮れ
ひとくとしもをる
見ひうるを宮もをりし

人ぬ人を共に吹風よ思ひて
世の中いかくこそとそれ吹風に
やよこそぬ人も立てうらやみ
一なき寄の人初をして余の和を身にうる白
袖千歳の春も霞もうらやましき
よそ目のこゝろ物を思ふの色
春のこゝろ思ひ出こそ三石野に
思ひいろ〳〵そ袖よ春の雨

こゝろ白ゆる松風の音
白ゆる系の一村すゝき枯る野よ
うゝ色をこゝろ白ゆるまよわりけて
あゝ白ゆ紅をこの結よせん
一前白よ中寄の紅ふ出を身白て
其紅を出る白
ちき出ゆ白ゆ病ゝも秋
うすこゝき野色の全わの色の葉よ

うすくこき雲人の人とりの名草に
あとまとて又人数の雲のもとまき
山高と葉して病と物をとし
一本寄のん朝ととりて生とる
木の葉法して色分
さのふと流の神よ問ある人
色よしれ物思ふ神のかりは
木の葉のちよ何を保ま

拾ふ世とをいはすれ果
もをを山の庵よ住ひく
山のの人白ん白いさもあはれ
ふりてをりうしの男や
忘れんとすれい人の面新
逢ぬまもをつ世をとふさて
うしあそのをそらてれ
といはへもねる神うれ

大ぐしの雲も為ひてむ月をもゆてし雲さそうよ
あるこの八月をもゆてし雲をあ
つれ〻人の老と為ぬ
ひとをあまする秋之淵は
さゆよいしをわれ月をて
今集むとてしをわよ長月れ
をゆの月をまち出つるれ

一其二哥の却りけすて仕うる
ちきしあるよ歌をあ
俳乃を世よ誰を教しん
うゝん事をゆりをゝ
ゆりわの乃を世をうも遠すて
俳諧なきあるわきハ乃をう
人のをの無特しうゆ
おゝさひし誰うまるこむ

あしたゝまものの名をたゝへ名を言
あまたゝわ衣服の誰なれは
心の花ゝ春の山ハ
いつくいは秋もなれぬ中そ
夏の夜い蛍ハ雲をとゝまるとて
也宗牛 雅房
ハるゝ秋 雅房
秋ハ月 宗牛 夕ゝ雨 雅房 山

河陽はまはらのとをとをうへき
ゝをわくとをわく方もあき
とをまき去ゝとをのそをて
ゝをとをとをてゝをうゝみうゝの
山もゝゝゝゝゝ
春とい人のわすれまねもし
ゝをうき伊のゝよゝねん
山ゝすまねゝのゝ

おしまれて八月もすぐる世ふ
さし花をさくらひてもらん
ほとゝぎす世ゝ雅を物ましし
俤と世ゝ和らゝ今さらけ
雅うまゝとゝ我ハ物まを
ゆよりる雲ゝふ和つまの京
冨士よ晴ゝる雪ゝさるきん
わゝ世をハゝうあたゝと待ひの

あゝの秋といつれゝるきん
一羽ハらをひ殘さとる
さひしさハゝ言のゝゝ秋の山
ゝゝ吹て夕萩ハ葉の秋
淋しさハゆゝれのゝようきゝ
元始凡も萩のあゝもとゝゝ
ゆゆゆゝて秋を見ん離ほ
春をとゝきよまゝ秋の凡

玉の緒をとどきいと秋の月すもるあ
はれき却とゝく

山よすむ月のいとをゝ
おとゝ聞れる世いろとゝもの我よりひ
ゆ遠ろ世いろとゝても我老ぬれいろひろん
やしかわ

爰ハ
ゆ八ゆよ山の井ゆ
むすふゆの雫に濁ろ山の井ん

あるても人よろれぬるん
ゆ水毎よあるぬんゝ

ゆひも苔ゆ行ハ行ハ
玉ゆ水の限ハうきゝわて
ゆまたさゆも細よ書ゆるもゝ
いひきゝゆて行我ゝのゆあゝ
うきゝとゝ

一女房のゝをかゝゆ仕紙あり

冬ふる谷のもみぢ葉は
よのうきよわの山の林しさ
山里はあのさびしきあれと
世のうきよわは住よわるり
木の葉のちるの袖をうれる
みそとそ思ひ月よさよ所為
秋いるを木の葉ふれもくるわき
みそとそ月はうるうれ

いのちるにあへる紅葉路
紅代はそくきはれも消わて
うるわるる人を紅葉の山下風
くくしれといのるねあを
ゆりよ思ひのくるわもそ寄
あるをと限りと淀う云ふ
紅葉は好来もきしる紅葉もれ
あるとうきわと思ふくるわそ

一ぬ寄にうち海ゝ鶴ゝ鳥
誰をとゝみんとてわもふし
世の中ハ蘭よすむ虫の涙まて
佐士の刈蘭よすむ虫の我ゝと
ねをとゝかうわ世をいとゝ足し
一白ハ我ゝ九ふゝとゝ
秋九ゝ須磨也寺ハ
物森ハ姨捨山乃月ゆゝ

ゝ秋ゝなくさわゝ
おゝ捨山よてる月をゝて
一白ハふくさあうねゝるゝ
一ゝとゝ不ゝ不ゝ紅葉よ分ゝ
ふれもやりあれ鶏ゝ
九さゝくゝ山りとゝ一松
張ゝも秋の汐ゝさゝと
苔花露もふゝの花びゝて

もゝさうをとんせる新貞
月遠く出れいぬる新雲
一前白よ分うき物を二つとうよ
別の面をとう出しうる
素性の袁いのもとを分て
ゝ鏡ゆく歩れ月細き新
待もとうれもうさいうし
ゝもれんけうしのまのうとて

夢露のゝゝ化のとゝり
ゝうう世を歩いゝゝの泡よ似て
一んゝゝきゝものよんゝを分うる
独雲をゝゝものゝ山陰
ゝれゝのゝものゝをゝもゝよ
ゝよゆゝゝは未ゝ迷りん
山吹をゝゝよゆる春もし
あゝゝ桜を一うよちる

今日のことはもそむもるを
はのすゑちとゝまりて長さ
月新よむの宿りうすの家
んも志ゝ山風も吹
夏ゝ海月ハ雲とも紛むん
うきをさしてとゝまりを作る
松よりハうるゝむよるるん
春ハ山路のはゝとゝるん

志ゝ月をむをんゝをし
一重紗よりゝ弥紗を付ゝる
夢とも思ふねを推ふん
人すも人のゝきを空ゝ
ゝくをかゝわりてそきく
忘れ者の人と逐俺て
一紗よりゝ合作してんゝゝ付ゝる
折ゝ先ハゝ月の入山

松風いうもむるもを松吹て
羽衣なるさてのうらもしん
必もかきまのかのもの山風
わひねうまの身にも年の越方
思をとくく春の物のあるん
あとをそこねるをうらく
高砂よりわ雲より花二ノ数清て
ねうらく悪僧あはさうらハ

長行ハ一ツをんもきれ
雪中乃笋の故事
一ツ場ハ云句述懐のうまかきうた
何ゆゑ立てもはるる
すんもらをぬあうまの山
むよ来てあをとうとうたるん
ゑ場の浦ハ月をうて
楚ねをうを松風を吹

高野の山にて雲居にむらもあらぬ
人の志しの高野の末
とかすみ空まちゆめ見
一こゑ　とふ幻のゆ
ゆ法ゝよりて来ぬるあゆ
ゆまくほしさにさかれ法く
ゆすれていらち絶うゝ夕へれ

みちのくの人の後いあらられて
志ほとふきゆゆ今もかせ
まくほとまくまくまつまを守も見
雪のまくるゝ山里
まくるゝ世も見
今月はゝゆゆ
みうきゆゆ神ゆ志ゆれん
思ひ志男と一疾ゆ捨もせて

みうるさいふるかわ
舟のうつ宮のうれ一人の夢
みともすれいあそふしき
ふれ寄蕪(コケ)花のもを独ねて
まる立うつるかもけも戒
薑(タキモノ)を同しのうれて
一会名のるよ名をを分ふる
をくれてゆうちれのあく

二

うれのくちりてゐる月見を
あまれるく藻乃ふを孔雀乃
夕波よりそいて燃(ヒ)てゐる海雲
いくらなかん月はうき雲
秋凡は何あていと文をうを
一ふの思ひさいふ思よ
と絶てへまるを年山凡
一ふしきと云変い拾りうきうもを

沖の小舟の漕ぬる月はあくるまで
くる〻月いるもなれもなかしき
霧とうかむしむといふ生すると
親をうかむ事と云いるるんと
みとうかしむと云ふ情をうるんと
うるうれしきとてふさけきん
又ものうきうるきんあり
一まつとと云字よ分秋あり

三

村〻すぎてやせくぬんん
春のもるまおるね奥山
変さひし裏れたちの光輪
ちちくれ光の色雲
智子法境のあよ一人寄て
そのそそるとうふる
秋寂寞月鶯のきねよ紀て
見人別ねるのうちふ山中

元宝を雪と翠を翅れ夕ゝに
とれば雲をうこ月をうれさ
独り住まるも人を待ち侘て
雪の夏さへ長きまゝ
あつまを境と年や越ねん
かゆるうるてゆよりく夏
れくの月よ雅(ツレナキ)郭公
名残惜も雪ぬ方と捨る身よ

山ゝ雲ゝ決ゝ行ゝ
一ゝも葉の名と分ゝ
花よゝ咲むいゝゝ
物の香の霞よ春の月落
ゝ焦むし化ける
樹雨ゝ日本の桜 宇和
もゝ彩 懐(ムキ)とゝ病む
梅ゝ多ゝ咲ゝ毎ゝ起ゝ

すてしまの梅うゑ香をする
むかしのこゝろ素の色のふるさと
春来ればいとむものとてはなし
ゆめかとぞ思ふくさむら山梅
むしとりとれるいかつてはね
山梅杉木の色ふりまさりて
一枝の白よりとりてねひとるもわわ
又木枝ひとつ枝又二方ふて

彩もあり小彩ひとつ彩ひて
いとる
人のそゝたつ孫もとや
咲花を木のこゝろ位のたかすて
まよはしのまくすわる世もな
山里のまゝ人も訪ねむまきて
玉鬘の白くあるまこゝろへて
人をゝたつる君ゝ思すへ

動ぬいはしぬ世ふしの川とまりて
君ゝあるゝの雲とゝよあれ
へ月の氣とらく称ふいとゝ
出りての家ゝ夜の船打わきて
坊りくゝも罷ぬんよ清つむ
新作寺をゝ右よゝんをりゝ

一小称ひとゝ白

捨ゝ身ハ本源寺法ゝ居ト(シテ)

ゝ世の月よゝんゝしふりゆし
きゝハきゝ思ハあゝしゝゝ
ゝゝふくゝも身の秋をく光蛍
ゝゝ行ゝゝゝ山とかくさむ
嶽の雲ゝ晴ひくく冷ゝ居ト(シテ)

一ゝゝふゝ白ハゝゝとしたるも不苦
ゝ月むゝゝとかけく夫人
ゝゝくく春の長江の浦ゝひて

[illegible]川葉に宿る雪の
武士の[illegible]の矢数を引て
[illegible]の[illegible]
放川矢のいてる所ハさらなり
一分白よりわひりて[illegible]る白猛矢おろ
と分のくへし
矢いら廣將よ 河内ゆ[illegible]
一筋の雲と[illegible]れひくを[illegible]

[illegible]れのあしこかし
[illegible]の葉[illegible]へよ越て
[illegible]し 搦[illegible]のことき
[illegible]ぬ[illegible]の下に厳
[illegible]ひ[illegible]
[illegible]へのむの[illegible]
[illegible]川[illegible]心の[illegible]
雲[illegible]きのこのむの[illegible]

○六十一ヶ日より六十五棒水の失言ヲ
ヒキヨムサセヲ

又六拍ニテ六拍ヲ
ニテ句ハ九合遠
うしれ演者サセヲ

草庵に居て松風を聞
枯るるものあるしらせかな
年ごとに逢坂山の関越て
雲ていまは去れいろいろもみん
吹とし吹ハすさまじき秋の風
枯る葉の一もとゝ薄むらさき
きけハなを星よりかなる川音
丁の宿をぬけの月よ起出て

すゝハあまるの水九里川
ら俗よりゝ見れハ一筋流て
一とせとなく水ハ能無大切し
月ふき雪の雲ハいりまて
水のりとのらぬ無ふ凡の言うて
世よあるまてと為をとく丈
老の寝つゝ人ハも安うて
川と苔の雲ハ霧霧

武蔵野をゆきゝ秋さるみのまて
今まんまてさくらのむすりの
高れしの人のまゝ〳〵家ぬの月
山まてとゝ〳〵ゆきうり垂つれ
塵つりるゝ成よ出ぬ秋ぬ
今よ老まて、ゝ生ゝ秋ぬの月
むよさけ濃の花ある秋の葉
一けるゝとゝふまを紅葉と付るゝ

秋をけるゝ出ぬ
をゝ秋りる遠山ゝ中の葉の色
安けるゝ月もよをゝ秋
ゝとゝ山とゝるゝの葉の色
一ゝ月の中不紅葉付るゝ
きけゝさゝ秋ぬ水のゝ
毎下に伏ゝんの月のゝる歌よ
山里のさゝけゝ月よゝ人ゝねて

凡や木の葉のそよめきん
秋代の月もかくやさやけき
夫のそのゆく方をき秋の空
ちりそのそよぎ古人乃面
影八ゆ者の木のすよかる影打て
一叉とゝ云ふ歌葉よ外ゆるゆ
墨とゝ見れハさらゝよ雲晴て
木の葉の後ハ人の歌の月

うゝ山ゆりてうゝ云ふ
者の葉紅の山乃紅ひゝく
松よりゆ葉ゆゝ紅の下草
古人のむハ好ゆ木の生す強て
はゆゝをよちるハゆゝるゝ
春の来る木の山の霞むゆ
一蛇とゝ初を分るゆ
しあゝたゝゆゝ人ゝ春

たのまれぬ袖の露の秋かなて
これのみのといはまほしきは色
秋色は紅葉もちらぬ嶺の宿
もみぢは春のたちぬ松
苔よりさひしくなる古山路の月
山寺治川の橋のしら波
舟のあるみなのうへ也ぬて
一ふりと云ふ句を紅葉より付ける

つれなくなとう云ふ句を
云の葉もしつのわいあるうへて
きうしの月
ほとしのわき世を雅面も我先て
一清くと云ふ句を紅葉より付ける
思ひ捨まるしとするも名て
雲の旅人ちるよ人ちるうへて
つれいてて月の宮ちる新

ひのてたるよふ雪よりハ消て
流るゝ中河の氷さへ
あたゝかに成るとあるよりこなたに
なるよ世の中
流れてきけハ鹿ふくゝもし
一ふるのまのちよわすゝちひて
付句ふ十文字ゝとい
春宗よすする春の川ら

蛙ふ海原の月ハ新ふけて
都ふるゝよすする奥山
立出て打ふ雲れハ雲ふ
網よりこれる夜の数
引あてゆる夕の流ふ小舟
拾る蓬ハ霧ものこる
引捨て麻テちふ夜の月
秋のゆよへよ小舟さしん

うら松の苔葉ひろひ月をうけて

一ふりと云ふ歌を苔葉と付るの

今そんのあしまもしの呆

六塚堂々松浦と云の月もろ

ゆりの花奥の塩竈もろ

〇あ士のねのうらいわは旅立て

物しのうる根て云の葉雪

見しうめんの浦の月ハ月川

一音信ふる士を歌葉ハ和二ツまて付て

ゆよ哀れ物わり・うれあく哀

よそ〻雪ふると云方ハ無て

けよ月りしさいみ〻の人

ふ〻ふ〻きんの奥をよよて

俄ふりくれそよ哀あわ

塗眠る例(スキ)塗に独泊れて

ゆよ月ふ〻ぬやいう〻の安

去年とうんれハ流るゝ水よりて
一ぱんとゝよゝ云ハ見ぬ事を
ゆりよゝ遠しいなゝへのゝ
蓬生ハ月より月の沈ぬん
見ハるゝ事し
清くすむ月よりとう和さん
うこき人よそゝよりもるる
桂ハの舟路の末ハ山ゆん

ゆりよゝ松浦のさゝ
見ハるゝ事し
かゝるゝ水よりとゝ
夕白ゝ月の舟と過ぎん
河のうるゝやゝよゝ
むゝうゝ葉ゆるゝ立田河
年くの去ハ月くよゝ
ゝ紅の葛ゝ流ゝ堪ぬ

見八幡宮

一望の目は高雄を分へし
　人の来ぬ秋風そふく
吉田山はるのまさきの葉をそ
　のこるもふる峯の一村
さやうれる月の林の夕霧
　翠(ノカサ)ぬるる九一夜
沿えんよりすむ唐崎の松はて

又ならしこうわるる時
　よそよりはうの紅葉ハ人ぬ多
たつひとりそ今世のかの山桜
一よ人ぬ多を解よと元ありて分てる白
　吉山よりしふまの地もうけ
　吉々の色よりなを茂りて
　鄙辺のするにふれる義哉
　拙恵て色の秋芽ふる枯て

義すくなよ少れる芋さ
年つきうきの侍士の身をつ
みよ一むさけるふてこ
清水せんねの月いなさて
うれのくみよ山凡そ夜
まさきき哀めの下草まち焦て
凡や指ものうよ水ん
みさの松ハ芋のもゆをテ浮

一ゆりとりと分るゆ一ゆく
芋ととうるんありくれン
住尾し芋清ら居よむ水て
ゆりハ哀ハ孔雀とりくあ
哀よるんるを沢(スサキ)き舟人の月
一とよ分愛しの之
つの古々とうもさうを
就の稚し寿人の新面よ霜凡

志ほやとなつく海士すら
遠をのがれつゝまよふ浦山
潮干潟ゆる松ゝ花と見わたん
高砂の月いろなのしら雪
住吉人と名ハ海よりわ
植置て庵のゆゑ松の陰ありて
一見とゝ句より付てこそ
うたてそかるゝの袖濃(シヲリカ)輪香

打もとなつかしきなを波なれて
見ぬ人ゝとてやらるゝ蛍火
夜葉ハ濃よ高ゝ枝もこゝて
一連と云句より付侍わ
うきこゝろ月とそうちなん
傳(ツキ)ハ歌丹の月ハ頽(クヅ)きて
誰波とて袖ぬらすらん
なくよりもなほ小夜ぬれ

蔭にて[illegible]し苔のうへ
秋の世い月ともとも枕して
ゆめのうすきてもぬるとも見へ
うき中やむしろ[illegible]ゆすよ忘るん
とても恋路とあらてまん
後の世の後[illegible]ちむらいや
一上のるれ末の文字を分るのよ[illegible]
ふるるる

池よ独の鶴を身よ知て
袖絞れしさ　冬九山里
ゆくの苔あれもなさうて
一末あられる毎てる秋の暮
紅葉ゆ一陽よ明とのて
あうゆ雲雲そ[illegible]れ行
出のねもよりるとゆ文ゆて
暗ゆ宿の言るさしさ

又分白上白にてもんい同しとも
あ我ひら残るくさ
人い岩猿之置よ暫（しばし）泊て
一成敗の上ちを無於無の分量
よし併（ソモモ）よ岩ちすもあれ
我まなくしの宮の心高
舟さしちよ秋の水上
路るの長る川への波（アサナギ）ちを寄て

一ほとゝぎす不於無の分量
ほのかさむ待めとれさ
人ねきたとも志ってもむ方よ
いくれとかねま勇とを寝る
きのふかる路のを泊て
むしの待ち果とるん
雑面とよとよりするん也我
一やとゝぎす不於無の分量

夏よりは行さよりなと海るうん
園もはなく花も日し花すて
ともしらしと人のみと高く流
独さんとやはるる山里よ
如思人とい分と絵るうん
たのみしは流てもはん秋のよ
一さてもうとうとう於葉の付風
月とはきわるよ扇と絵るん

無とは流れ行てもんと寄る
さてもうとうれていし云の際
ひとり川ときけい新もいそれを
扇もうきせるうむの流
松のうえ流やの数々の煙すて
一いうてうと云詞の付風
人とうとうれといて地もん
月れるや流て高る秋の月

君よいそうらひをいたしたれん
あらきあや　ひの果の苔の糸
月すもらんいそねねん
夢てあらさまよ　秋のよよ

一同答しうら分枝
ねるを独とも白と果まし
うらもとも世のくきゆようて
峯越れよりの無ふなる

はるのそとをいてこのとうえ合ま
せりていさ夜の夏たなもと
ふき迄よんうそくも独りて

一何と云句の分解
そうれのまも何よなんん
知家のきてねれすもお歩
何とよすうよ志ほとうん
山里のものゆとうなやこん

一ひとの日本紀葉の分部
ひてこそいと珍しうれ
三人の唐土のこと山桜
んとうとくくとつれ雪き
あひて雪ひ山まし給の
一とうとうとうとの日本紀葉の分部
ひ成ひうわよし雪もうけ
ゑれ物ぬ声もうて叫る

きうんとうわ勇を振て
為てさいとかとさうの夕暮て
ゑみとるとうわ地き伊(ヲモテ)
三湯を給毋の末のるかて
まとるひうこゆり俊
桜の月夜神ゆう出る忘て
さびきとうわ和静也
山ふとうるとよるねむまて

雲井さそうわすれぬほのぐ山
春の夜の月まちきたる雲井て
ふるさと人をみるえうつゝ
ぬ筆はつき哉の月のもと

一はしゝ詞の分量
雲路もとゝ侍るのゝ
春深く霞わけ富士のねさて
霧の下葉のうゝ人はは

一前白山ゆきゝ路の玉川 赤晴て
きゝ花ゆゝ宿わ多ん
電雨の表紙の柳 社三
たゝ名をたゝ
ゆきゝ時世きの山乃郭公
一雨雲の中雲紫を分る
山ハたゝ人新も乃夜深て

尾上の松は雲や引ぬん
はるくの人へかと思ふ程そ
むかしはうもれしのゝ
一さとれのゝ西行の
人の知こいさとかゝれき
きるへきよもきき山路の郭公
さとれ深草もかゝわれん
俤ふれて色はひかる歌人

名所とする
きゝ馬松のすゝしあるのの
さゝ中の路路のゝと雪よそて
雪よ明行志賀の浦
秋の夜ゝかりくの山ゝ
一国とへてそこる名所
分けすゝ忍のをきもゝ
白川を隠乃実よ出て

一下白口傳のうり二五三四の句

嫦娥悪行庵や文ねんん

山のをきくやうん高ねんむ

夕の雲よ茜山さらう

をき歌のきていろきんん

是より三四の句

山のをきくや夕ねんん

をきき歌の後さりや

嫦娥悪行庵や文ねん

夕の雲よ茜山さらう

一人身の句

歌よ宮方の糸桂宮入ぬ

をを山松のゆかれのうけ

一宮人紙衣の句

をさり秋をむしんねる法

五月雨の松虫又鳴て

発句

月白き水の堀りうゑ蓮もる
花神白毎よりて工夫あるべし

一面に霧の晴の
よるの毎くとき去のこりと
吉柳の新宅の雅江を賜て
ひんれい横よりあそびよりあり
有無とする川柳水越て
一生ものの話なるべい出るとを云をゆるし

付句と海の付我と人より付人を我より付
名歌を我より付句を名歌より付句を
と云ふし第ごあるよれ列して待べし
立ちてゆくるべきこと小藤原
玉川なる野路の旅人
いつれも志賀をいとふとすれ
まちくもなりの海特とも
唐々文好月人はとまれ物

鹿のこゑあはしく吹こゝ山里よ
初の紫こゝ[illegible]
吉野のむい苔地よりを打て
あ[illegible]れいとをあまし[illegible]山
いとられぬ新[illegible]
[illegible]の一夢
[illegible]
[illegible]

蘆生九月さい月さへ[illegible]て
後のこゝよりなる[illegible]
白物乃吉野の山の[illegible]て、
我人誰よりかこゝん秋の[illegible]
萩よ[illegible]
[illegible]
[illegible]
人も称[illegible]

老てこそ哀なれ
夕日よりなほ志なかるべき浦浪
はるばるきたれ人々の初しられ
一日潮すゝ白
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一二月をする白
[illegible]
[illegible]人のあるべきふむ月二月々
一年にする歌
月の[illegible]
[illegible]
陰陽の道歌八前白をとうとくする白をいふ
[illegible]

[illegible]陽いあらぬ[illegible]
陰のうくれる方に陰陽うきする句

舟の行末をはりの入てゆく
磯山まつくれる松の末枯て

又陰陽うきする発句

[illegible]

又陰陽のうきする句

いろくきそのこまの假外

伯母捨の月も都乃[illegible]
一かけの不能葉十文字付三句する事
なるべし此ハ[illegible]
[illegible]世ハ何のもゝ[illegible]
木乃葉の後も[illegible]栗のこゑ
一又うきをもの[illegible]結てかとを
立[illegible]
山ハまつ[illegible]
引小松[illegible]

一又人を無常歌てゆとて
あまれ衣や無ようらん
りう月の山の松陰に
住うれしう世とて
住うれしう世とて
人々我古々の苔ちり
住うれしう世といとて
一又こうあを無常ちうひをとて
何とてつきせ世に住ん

身を捨て安うらへしと知うう
りけよ重に成れ推量乃高
一ゆうれを無常
ゆるる雲の山くすん
ゆ雲ともへうそのねおいんそ
ゆ雲ともへうそのねおいんそ
今よりハ月とこそ
今よりハ月とこそ
一けよ無常雲を於無

[illegible]八や秋ゝゆゝ[illegible]ん
[illegible]霜ゝ[illegible]古畑の行あし
誰そとゝ[illegible]れ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

一宣長歌集

[illegible]月も[illegible]ん
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

一

餘情の句

長命(ナカラヘ)て[illegible]
[illegible]

発句 あれたるとき去日九の深く玉川落

同 吹ふきも花咲ぬる小春の風

同 さすもやうわのうつる山さくら

一三度切れ句

発句 時ハ去 春ハ暖 七さくら

七里見ハ紅ふる雪もおし

月出る石橋ゆ年九ヶ月夜

月毎ハ峯ハ松風 谷の水

前句と釈しうる句

ひとわる義の海を漕舟

九ヶ月て月よ寄する友ハ

青ハ月ハ夜ハ分しらぬ

一中古と當世九句のこ持

旅人のあ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

旅人のまハあ[illegible]ハ[illegible]

一お句ハ[illegible]句のこ

塩干とはんれいの名所なり

一其之例塩竈の松は蓬ヶ嶋

蓬ヶ嶋てとまれい行をまつなり

待てんを金沢川海

月夫婦沼のひとわの部に

月代のゝてハ行をまつなり

一ひろ月のゝ

右節のもの奥を舞ねん

まつゝる誰世よ極し山桜

一新白を其後まそする白髪上まで

ゆゝすハ行をゝすす

ゆゝへ長よふひゝく行の紫

名を名もよわゝとゝ名ん

なまえの嶋の白物浦色

ゆゝ神の貸遠くゝ船ハ言ゝく

一ゝまして可逃仲

空よ住月や見ひとを誘引
ふるき声よ ゆしてふく
涙すい恨やせまし 雲よ月の
松風 吹くく男康 吹く山
旅すと人の出るいとのく
又逢人角ハ白菊のかわの世よ

一養高祢

あしの葉にて あくよ 残れる

人人白涙山のまくねの捨く
もを次世くて 寝ぬれ
さくの方すう山ふ凡よ 歳て
人もねをんいく 物く
発てくて 歳ともれいくあよ

一席乃出歌

甘すよ清まて 塔る 巡くさ
山りとの去のあく小田打七

一未来記の連歌

これハ彼よりも遠のあく機

あかつき殺絶の海も知ぬ身よ

清いたるうよりのるとくてきく

世をうらハ来ん世の義も空に

天清ア寒宵のおよ声空て

春かんよりよ義かうんして

一発白脇才三のり

発白ハいよも時宜よれ高きてうらうよ

すへし

脇白ハ発白のとうけて時宜ハ原遠

うにすへし

才三ハさのう不付ともをうく出をよ

大百三十七丸

元禄十丁丑歳九月中旬

京二条通冨小路西江入丁

書林　野田藤八

水玉堂蔵板歌書連歌書目

京都寺町五條上ル町　天王寺屋市郎兵衛

和歌六本集	長清 道蓮	三十七	堀河百首
和歌初中抄	太秦顕昭 万葉考	二十	太命 次命
和歌拾穂抄	類聚 作例八便よす	十五	萬葉分類抄
和歌あゆひ抄	北邑成章	六	小本
百家類聚	小本 北邑成寿	二	梅井一宝
詞葉新雅	小本 同上	一	快入

南面経説	二	同	萬葉摺
快入	一	同	萬葉摺
小本	一	七代七百首	北邑成章
快入	一	同	萬葉摺
小本	一	同	二編

和歌袋　小河盛均　北邊成壽　八
寂蓮長明家集　四
和歌連歌手引　公河の宇合小竹　二
連歌新式增鈔　二条良基公　紹巴增鈔　二
新撰菟玖波集　宗祇法師　十
連歌大原三吟　宗祇　宗長　元輔　心敬僧都　二

はしがき

歌道派唯抄　北邊成壽　一
歌林車端松　小本　二
はしがき草　才珍本帙入　二
同　海紫摺　同帙入　一
連歌菟玖波集　同上　開出　十
連歌花紫　宗祇宗長法橋　横開本　一
百材集　紹巴　横開本　和歌連歌書　二
連歌隨紫集　紹巴　連歌入景物詞　小本　三